

## 資料9 説教 『キリスト者の完全』

「私はすでに得たのでもなく、すでに完全にされているのではありません。」

ピリピ3章12節

### 序

1 聖書の中にこれ以上人の感情を害してきた言葉はありません。多くの人は(完全)という用語に耐えられません。その言葉の響きそれ自体、彼らにはおぞましいものです。(完全を説教する)(これが普通の言い方ですが)、すなわちこの地上で完全を手にすることができると語る者はだれであっても、異教徒や取税人よ-悪い者だというそしりを受ける危険を冒すこととなります。

2 「その言葉がそのようにつまずきになるのなら」その表現を用いるのをやめればよいと勧めてくれた者もいました。しかしこの言葉は神のみことばの中になのでしょうか。「全部の者がつまずいたとしても」(マタ26章33節参)、もしその言葉が聖書の中にあるのならば、神の使者は何の権威をもってこれを排除できるのでしょうか。しかし私たちは「キリストのことを、このようには学びませんでした」(エペ4章20節参)。またそうすることで「悪魔に機会を与えてはなりません」(エペ4章27節参)。人が聞いてくれても聞くのを我慢しているようでも(エゼ2章5, 7節、3章11節参)神が語られたことは何でも話すつもりです。キリストの奉仕者はだれであっても、「神のご計画の全体を'余すところなく」彼らに「知らせた」とき、「すべての人たちの血について責任がない」(使徒20章8節)ということを知っているからです。

3 したがって、私たちはこの表現を捨ててしまうことはできません。なぜならそれは人間のことばではなく神のことばだからです(1テサニ1章3節参)。しかし私たちはその言葉の意味を説明できるし、また説明すべきです。真実な心を持った人が、上に召してくださる神の栄冠を得るという目標から(ピリ3:14参)右にも左にもそれてしまわないためです。またパウロがすでに引用された節で自分のことを完全でないという言い方をしているために、説明する必要性がさらに増していると言えます。彼は「私はすでに完全にされているのでもありません」(ピリ3章12節)と言っています。ところがそのあとすぐ15節で、自分も他の人の多くも完全であるという言い方をしています。彼は「ですから完全である者はみな、このような考え方をしましょう」(同15節)と言っています。

4 ですから私は目標を目指して「心に走っている人たちに光を与えるためだけでなくこの一見した矛盾から生じる困難を取り除くことを目的として、足の不自由な人が道を踏み外してしまわないように、次のことを述べてみたいと思います。

第一に、クリスチャンが完全でないというのはどういう意味か。

、 、 、

第二に、クリスチャンが完全であるというのはどういう意味か。

第一に、クリスチャンが(完全でない)というのはどういう意味かを述べてみたいと思います。

先ず経験と聖書の両方から考えて、知識において完全ではないということが言えます。この地上において無知から解放されるレベルにまで完全になることはありません。クリスチャンは他の人と同様に、この世に関する多くのことを知っているかもしれません。また来るべき世に関して神が啓示された一般的真理も知っています。また彼らは、「神の子と呼ばれるために、御父がどんなにすばらしい愛を与えてくださったか」(Iヨハ3章3節参)を知っています。(これは生来の人間は受け取ることができません。靈的に認識するものだからです)。彼らは心の中で、神の「靈の全能の力の働き」(エペー1章9節参)を知っているし、また彼らの道を教え、すべてのことを働かせて益としてくださる(ロマ8章28節参)神の摂理の知恵も知っています。彼らは生涯のあらゆる状況において主が彼らに何を求めておられるのかを知っているし、「神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つ」(使徒24章16節参)ためにはどうしたらよいかも弃えています。

2 しかし、彼らが知らないことは数限りなくあります。全能なる方ご自身に関して言えば、その方を完全に探し求めるということはできません(ヨブ37章23節参)。「見よ。これらはただ神の道の外側にすぎない。だれが、その力ある雷を聞き分けようか」(ヨブ26章1-4節参)。「天においてあかしするものが三つあります。父と子と聖霊です。この三つが一つとなるのです」(Iヨハ5章7-8節)といった事柄や、あるいはどうして永遠の神の御子が「仕える者の姿をとられた」(ピリ2章7節参)のかといったことについて、彼らが理解できないというつもりはありません。私が言いたいのは、彼らが神の属性について、また神の性質の詳細については何も知らないということです。また彼らは、神がこの地上でご自身のすばらしいみわざを行われる時について、それが「いつとか、どんなときとかいうことを知りません」(使徒1章7節参)。また世界が始まって以来、神がご自分のしもべや預言者たちによって部分的にはあっても啓示されたことがいつ起きるかも知りません。まして彼らは、神が「ご自分で選んだ民の」(マコ13章29節参)数を満たしてご自分の王国の建設を急がれる時を知らないし、「天が大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去る」(I Iペテ3章10節参)時がいつかも知りません。

3 彼らは人の子に関する神の現在の摂理について、その多くの理由さえ知りません。それでこの地上においては必然的に安心できるのです。「雲と暗やみが主を取り囲んで」いるけれども、「義とさばきが御座の基である」(詩篇97篇2節)かのごとくです。主はご自分が彼らをどのように扱われるかということについて、「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります」(ヨハ22章7節)と言われます。実際彼らは自分たちの前にあることについて、目に見える形の神の御手のわざについてさえほとんど認識していません。神がどのようにして「北に虚空を張り、地を何もない上に掛けられる」(ヨブ26章7節参)のか、神がどのようにこの巨大な機械のすべての部品を決

して壊れることのない秘密の鎖によってつなげているのか、彼らには分かっていません。最善といわれる人たちでさえも、その無知はあまりに大きく、その知識はきわめてわずかです。

4 このように地上の生活においては、無知から解放されるというような意味で完全を手にすることのできる人はいません。そして第二に、間違いから解放されるような意味で完全を手にできる人もいません。間違いは実際のところ、無知の結果としてほとんど避けられないものです。「一部分」しか知らない人は(1 コリ 13 章9、12参)、自分が知らないことについては間違いを犯しやすいからです。

確かに神の子は、救いにとって本質的に重要なことについて間違えることはありません。彼らが「やみを光、光をやみと」(イザ5章20節参)することもないし、「いのちの選択を間違えることで死を求める」ようなこともありません。それは彼らが「神から教えられている」(ヨハ6章45節、1テサ4章9節)からです。

神が彼らに教えておられる道、すなわちホリネスの道は非常にはっきりしたものであり「旅人も愚か者も、これに迷い込むことはない」(イザ35章8節参)のです。しかし救いにとって本質的ではないことにおいては実際に間違えるし、しかもそれはしばしば起ります。最善といわれる人、また最も賢いといわれる人も事実に関して間違いを犯します。実際に起ったことを信じなかったり、起らなかったことを信じたりするわけです。また事実そのこと自体に関しては間違っていなかったとしても、その事情を取り違えていることもあります。事実と全く違うように思い込んでしまう事柄が多くあるのです。そしてここからまたさらに多くの間違いが生じることとなります。過去のことであれ現在のことであれ実際には悪い行動を善であると取り違えてしまうこともあります。また逆に、善い行動を悪であると思ってしまうこともあります。また人間の性質についても、事実と違った判断をしてしまうこともあります。善い人を実際よりも善いと判断したり、悪い人を実際よりも悪いと判断したりするだけではありません。過去においても現在においても、悪い人をあたかも善い人であるかのように信じることもあります。またそうでない場合には、過去においても現在においても、聖く責められるところのない人を悪い人とみなしてしまうこともおそらくあるでしょう。

5 また最善といわれる人でも、聖書それ自体について間違いを避けようと注意しながら、やはり間違える傾向にあり、実際彼らは日々間違いを犯します。特に必ずしも実践的でない部分について間違いを犯すようです。したがって、神の子でさえ解釈が一致していない聖書の箇所が多くあり、また意見の違いがあるからといって彼らがたとえどちらの意見を持っても神の子ではないことを証明するものではありません。意見の違いは、生きている人間に(全知)であることを期待することができないのと同じく、(無誤)であることを期待してはいけないということを証明するものです。

6 前述のこの項目について観察できる事柄に対し、ヨハネが信仰を持った兄弟たちに「あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、すべてのことを知っています」(1

ヨハ2章20節)と言っているという反論があるかもしれませんが、その答はいたって簡単で、「あなたは自分のたましいの健康にとって必要なことすべてを知っている」ということです。ヨハネはこれを拡大解釈しようとは思っていなかったし、知識を絶対的な意味で語ることはできなかったということは、以下のことから明らかです。すなわち第一には、この知識を絶対的なものとするなら、弟子を「その主人にまさる」(マタ10章24節)ものとして描写することになってしまうということです。キリストご自身、人としてすべてのことを知っていたわけではないからです。「その時がいつであるかは、だれも知りません。言知りません。ただ父だけが知っておられます」(マタ24章36節参照)と記されています。第二に、「だれにも惑わされてはいけません」(エペ5章6節、Iヨハ3章7節)という何度も繰り返されている彼の警告だけでなく、「すべてのことを知っています」という言葉に続く「私は、あなたがたを惑わそうとする人たちについて以上のことを書いて来ました」(Iヨハ2章26節)というヨハネ自身の言葉からも明らかです。「だれにも惑わされてはいけません」というのは、聖なる方からの注ぎの油がある(Iヨハネ2章26節)まさにその人たちが、無知だけでなく間違いにも傾きやすいのでなかったならば、全く必要ではありませんでした。

7したがってクリスチャンであっても、無知や間違いから解放されるというレベルで完全なのではありません。ここで付け加えたいと思います。第三に、クリスチャンは弱さから解放されているのでもありません。ただこの言葉は正しく理解するように注意しなければなりません。ありきたりの罪にそのやわらかい名前をつけてはいけません。もちろんそうしている人もいます。「弱きはだれにでもあるが、私のは、酔っぱらうことさ」という言い方をする人がいます。汚れという弱さを持っている人もいます。神の聖なる御名をみだりに唱えるという弱さを持っている人もいます。さらに自分の兄弟を「ばか者」(マタ5章22節)呼ばわりする弱さを持っていたり、「侮辱をもって侮辱に報いる」(Iペテ3章9節)という弱さを持っている人もいます。こういう言い方をする人は、もし悔い改めなければ、その弱さを持ったまま地獄に真っ逆さまに落ちてしまうことは明らかです(詩篇55篇1-5節)。私がここで意味しているのは、(肉体的弱さ)という言い方が相応しいものだけでなく、道徳的性質を帯びていないすべての内的・外的不完全さのことです。これはたとえば、理解の弱さや遅さ、把握の鈍さや混乱、支離滅裂な思想、ばたばたと落ち着かなかったり陰気だったりする想像性といったことで。記憶の速さや記憶の良さが欠けているというのもこの弱さに入ります(この種の弱さにはこれ以上言及ぼさないでおきます)。こういった弱さは当然あります。すなわち、ロベた、用語の不適切さ、発音の品のなさといったことで、これに名前を付けて呼ぶことのできないような会話や行動における欠点を加えることもできます。これは多かれ少なかれ、最善といわれる人たちの中にある弱さです。そして「霊がこれをくださった神に帰る」(伝道12章7節参)ときまで、このようなことから完全に解放されることを期待できる人はいません。

8 私たちは霊が神に帰るときまで、誘惑から全解放されることも期待できません。誘

惑のない完全は地上のものではありません。あらゆる不潔な行いをむさぼるようになって  
いる(エペ4章1-9節)ために誘惑に抵抗もしないし、誘惑があることすら気づかず、誘惑  
されることがないように見える人も確かにいます。また敬虔という形骸化の中で深く眠り  
込んでいるために、たましいの賢い敵がわざわざ大きな罪を犯すよう誘惑して、彼らが永  
遠の火の中に落ちる前に(イザ33章1-4節参)目覚めてしまうことのないようにしてい  
る人も多くあります。また神の子で、「値なしに義と認められ」、キリストの血による「贖  
い」を見いだした(ロマ3章24節参)ため、今は誘惑を感じないという人がいることも承  
知しています。神は彼らの敵に、「わたしの油注がれた者たちに触れるな。わたしの子た  
ちに危害を加えるな」(I歴代16章22節、詩篇105篇1-5節参)と言われました。  
そしてこのとき、これは数週間であるかもしれないし、数か月であるかもしれませんが神  
は彼らを「地の高い所に上らせてくださり」(申命32章13節参)、悪い者が放つ火矢を  
(エペ6章1-6節)はるかに越えて、わしの翼に乗せているかのように(出19章4節参)彼  
らを運んでくださいます。しかし神の御子ご自身が肉体を持っておられたときに、その生  
涯の終わりにいたるまで誘惑を受けたということを考えてみただけでも学べるように、こ  
の状態がそういつまでも続くわけではありません。したがって彼のしもべであれば同じで  
あると考えるべきで、「しもべがその主人のようになれば十分なのです」(マタ10章  
25節)

9 したがってクリスチャンの完全は、無知や間違い弱さや誘惑から免れることを意味  
しません(そうだと思っている人もいます)。実際、クリスチャンの完全はホーリネスを言い  
換えたものにすぎません。これらは同じことを指す二つの呼び方です。このようにだれで  
あっても完全である人は聖い人であり、聖書的な意味で聖い人は完全な人です。最後に、  
こうした意味での絶対的完全は地上にないと言えるだろうと思います。継続的に増大して  
いくことを認めない(段階的完全)は普通このように言われていますが一ありません。人がど  
れだけ多くを得たとしても、どれだけ高い完全を自分のものにしたとしても彼はそれでも  
「恵みにおいて成長し」(IIペテ3章1-8節)、日々彼の救主である神の知識と愛において  
前進する必要があるのです。

## 二

1 それではどのような意味でクリスチャンは完全なのでしょう。第二にこのこと  
について述べようと思います。それで、生来の人間の生活だけでなくクリスチャン生活に  
おいても、いくつかの段階があるということを前提としておきたいと思います。神の子と  
いっても、生まれたばかりの赤ちゃんもいれば、成熟している者もいます。したがってヨ  
ハネはその書簡の中で(2章1-2節など)、それぞれ別々に「小さい者たちよ」と呼ぶこと  
もあれば、「若い者たちよ」と呼ぶこともあれば、また「父たちよ」と呼ぶ場合もありま  
す。「子どもたちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたの罪が赦されたからで  
す。」すなわちこの点にまで達し、「価なしに義と認められ」(ローマ3章24節)、「イ  
エス・キリストによって、神との平和を持っている」(ロマ5章1節)からというのです。さ

らに若い者については、「若い者たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです」と述べています。すなわち(後で付け加えているように)「あなたがたが強い者であり、神のみことばが、あなたがたのうちにとどまっている」からです。「悪い者が放つ火矢」、すなわちあなたが得た最初の平和を乱した悪い者が投げ込んだ疑いと恐れを「消すことができました」(エペ6章16節)。

そしてあなたの罪は赦されているという神の証しが、今「あなたがたのうちにとどまっている」(Iヨハ2章14, 17節参)というのです。父たちについては、「父たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが初めからおられる方を、知ったからです」と述べています。あなたがたは父と子とキリストの御霊をたましいの奥底で知りました。あなたがたは「キリストの満ち満ちた身たけにまで達した完全なおとな」(エペ4章1-3節参)です。

2 私がこの説教の後半部分で主に語ろうとしているのはこの人たちについてです。この父たちと呼ばれる人たちだけが正しい意味でクリスチャンだからです。しかし「キリストにある幼子」(Iコリ3章1節)できえ、他のことはさておき、罪を犯さないという意味で完全であり、「神から生まれて」この表現もいろいろな意味で取られていますが)います(Iヨハ3章9節、4章7節)。もしだれかが神の子たちのこの特権について疑いを持つならば、その問題は抽象的な推論では解決できません。抽象的推論とは無限に引き延ばされる場合があり、それでありながら論点はずもとのままということもあるからです。

これはだれか特定の人を経験によって決定すべきものではありません。罪を犯しながら自分は罪を犯していないと思い込んでいる人も多くいますが、これも議論のどちらの側をも論証するものではありません。私たちは「おしえとあかしに尋ねなければなりません」(イザ8章5節)。「たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです」(ロマ3章4節)。神のことばに従いましょう。しかも神のことばだけに従うべきです。私たちは神のことばによって裁かれるべきです。

3 さて神のことばがはっきりと宣言していることは、義とされた者、すなわち最低限新しく生まれている者は「罪の中にとどまってはいない」ということです。彼らはもはや「その中に生きていられません」(ロマ6章1, 2節)。彼らは「キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっており」(同5)、彼らの「古い人はキリストとともに十字架につけられ、罪のからだは滅びて、もはやこれからは罪の奴隷ではなくなる」ためであり、キリストとともに「死んでしまった者は、罪から解放されている」(同6, 7)のです。また彼らは「罪に対しては死に、神に対しては生きた者」(同11)であり、「律法の下にはな-、恵みの下にある者を罪が支配することはなく、「罪から解放されて、義の奴隷となったのです」(同14, 18)。

4 これらの言葉が意味していることを最も小さく見ても、そこで言われている人たち、すなわち本当の意味でのクリスチャンやキリストを信じる者は、外的な罪から自由にされているということは言えます。ここでパウロがそのように様々な言い方で表現しているの

と同じ自由についてペテロも述べています。「肉体において苦しみを受けた人は、罪とのかかわりを断ちました。こうしてもはや人間の欲望のためではなく神のみこころのために過ごすようになるのです」(Iペテ4章1-2節)「罪とのかかわりを断ちました」という言い方は、ただ蟬に外的な行動のことを言っているというような最低の取りをしても、外的な行為、すなわち外的な律法の違反とのかかわりを断ったということを意味しているにちがひありません。

5 しかし最も良く表現されているのはヨハネが第一の手紙の三章で述べている有名なことばです。「罪のうちに歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現われたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。だれでも神から生まれた者は、罪のうちに歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちに歩むことができないのです」(Iヨハネ3章8-9節) また5章18節では、「神によって生まれた者はだれも罪の中に生きないことを、私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守ってくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです」と述べています。

6 このみことばは、彼は(故意に)罪を犯すことはない、あるいは(習慣的に)罪を犯すことはない、あるいは(他の人が犯すように罪を犯すことはない)、あるいは(以前のように)罪を犯すことはないと言っているにすぎない、という言い方が実際にされます。しかしそれがこのようなことを言ったのでしょうか。ヨハネでしょうか。とんでもありません。この聖書の箇所にも、車全体にも、この章全体にも、そして彼の書のどこを見ても、そのようなことばはありません。ですからもちろんのこと、大胆な主張に答える最善の方法は単純に答えることを拒むことです。そしてだれかがそれを神のことばから証明できるのであれば、彼の明確な論拠を出してもらうようにしましょう。

7 このおかしい主張を支持するためにしばしば持ち出されてきた一種の理論があります。これは神のことばに記録されている例から取られています。彼らは、「アブラハムはごまかして自分の妻を否認しておきながら罪を犯さなかったというのか。モーセは「水のほとりで」主を怒らせたのに(詩篇106篇32節)罪を犯さなかったというのか。すべてに代わるような一つの例をあげれば、「神の心になつた人物」(使徒13章22節)ダビデでさえ、ヘテ人ウリヤの件では罪を犯さなかったというのか。しかも殺人と姦淫の罪を犯したではないか」。確かにダビデは罪を犯しました。これはみな真実です。しかしこのことから何を導き出したのですか。第一に、ダビデは生涯全般を通じてユダヤ人の間で最も堅い人の王だったということを認めてもよいと思います。それから第二に、ユダヤ人の中の最も聖い人たちも、ときどきは罪を犯しました。しかしもしここから、すべてのクリスチャンは生きている以上罪を犯すし、また必ず犯すものであるという結論を導き出すならば、それは全面的に否定したいと思います。これらの前提からこの結論を導き出すのは無理です。

8 このような議論をする人は、主の宣言を考えたことがないように思います。「まこと

に、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。

しかも、天の御国の一番小さい者でも彼より偉大です」(マタ 11 章 11 節)。ここで言う「天の御国」とは栄光の王国を指すと考えた人も実際にたのではないかと思います。天国で栄光を受けた聖徒の中で最も小さい者でさえ、地上のだれよりも偉大であるということ、あたかも神の御子がわたしたちに示してくださったかのように思ってしまうということです。このことを述べれば反論するに十分だと思います。したがってここで言う「天の御国」は(続く節では「激しく攻められています」と言われているように)あるいはルカはそれを「神の国」といっていますが、キリストを信じる真の意味でのクリスチャンすべてが属する地上の神の国のことであるということには疑いの余地がありません。それで主はこのことばの中で二つのことを言われました。第 1 に、彼が肉を取って来られる前は、人の子の中にバプテスマのヨハネよりも偉大な者はいませんでした。ですからこのことから、アブラハムもダビデもどのユダヤ人もヨハネより偉大ではなかったということは明らかです。第二に主が言われたことは、神の国で最も小さい者でも(主は地上に建設するためにこの神の国の中に来られたわけで、今激しい人たちがそれを奪い取ろうとしているのです)、ヨハネよりは偉大であるということです。ですから結論は簡単です。今キリストを王として崇めている人の中で最も小さい者でも、かつてのアブラハムやダビデやどのユダヤ人よりも偉大なのです。彼らの中にヨハネよりも偉大な者はいませんでした。しかし天の御国で最も小さい者でもヨハネより偉大です。この偉大ということの意味は、より偉大な預言者であるということではありません(そう解釈した人もいました)。これは明らかに事実と反しているからです。それは神の恵みと主イエス・キリストの知識において、より偉大であるということです。したがって、かつてユダヤ人に与えられた特権によって真のクリスチャンの特権を量ることはできません。彼らの職分(あるいは摂理)に栄光があることは私たちも認めますが、私たちの職分は「なおさら栄光があふれる」(II コリ 3 章 8-9 節参)ものです。クリスチャンの摂理をユダヤ教の基準にまで下げようとする者、律法と預言者に記録として残っている弱きの例を収集して、「キリストを着た」(ガラ 3 章 27 節)人たちが彼らより大きな力を与えられていることなどないと結論づける者はだれであっても、大きな「思い違いをしているのであり、聖書も神の力も知らない」(マタ 22 章 29 節参)のです。

9 「しかし、たとえこのような例から推論することができなくても、同じことを論証する主張は聖書の中にないのですか。聖書ははっきりと、『正しい者であっても一日に七度は罪を犯す』と言っていないませんか」。お答えしましょう。いいえ。聖書はそのようなことを言っていない。聖書の中にそのような箇所はありません。あなたが言おうとしている聖書の箇所は、24 章 16 節だと思いますが、その箇所はこうなっています。「正しい者は七たび倒れても、また起き上がるからだ」。しかしこれは別のことを言っています。まず、「一日」という言葉はここにありません。ですから正しい者が生涯で七たび倒れてもと解釈しても、ここで言われていることから離れてしまうことはありません。第二に、こ



ここでは「罪に落ちる」というようなことは全く言われていません。ここで言われているのは「一時的な苦難に陥る」ということです。このことはその前の節からも分かります。「悪者よ。正しい人の住まいをねらうな。彼のいこいの場所を荒らすな」。そしてそれに続いて、「正しい者は七たび倒れても、また起き上がるからだ。悪者はつまずいて滅びる」となっているわけです。彼はあたかも、「神は彼をその苦しみから救われるだろう。しかしあなたが倒れるときに、あなたを救う者はいないだろう」と言っているかのようです。

10しかし反対する人たちはこう続けます。「でも、他の箇所を見れば、たとえばソロモンは、『罪を犯さない人間はひとりもないのですから』(I列王8章46節、II歴代誌6章36節)とはっきり言っています。さらに『地上には、善を行い、罪を犯さない正しい人はひとりもないから』(伝道7章20節)とも言っています」。お答えしましょう。確かにソロモンの時代にはそうでした。そうです。アダムからモーセまで、モーセからソロモンまで、そしてソロモンからキリストまではそうでした。その時代には罪を犯さない人はいませんでした。罪が世に入ってきた日以来、「罪を除く」(Iヨハ3章5節)ために神の御子が現れるまで、善を行い、罪を犯さない正しい人は地上にいませんでした。「相続人というものは、子どものうちは、奴隷と少しも違わず」(ガラ4章1節)というのは間違いなく真理です。しかも彼らは(ユダヤ教の摂理のもとにいた昔の聖なる人たちはみな)、教会がまだ子どもの状態だった間は「この世の要素の下に奴隷になっていました。しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、律法の下にある者となさいました。これは律法の下にある者を購い出すため、彼らが子としての身分を受けようになるためです」(ガラ4章3-5節5参)。それは彼らが「今、私たちの救主キリスト・イエスの現れによって明らかにされた恵みを」受け入れるためです。「キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました」(IIテモテ1章10節)ですから彼らは今、「奴隷ではなく、子です」(ガラ4章7節)。それで律法の下にあった者の状態がどのようなものであったにしても、福音が与えられた以上、「神によって生まれた者はだれも罪の中に生きない」(Iヨハ5章18節)ということをやハネとともに確信をもって申し上げたいと思います。

11 ユダヤ教の恵みとキリスト教の恵みの間にある大きな差と、ヨハネが福音書の7章38-39節などで述べているその理由に特に注意して目をとめることはきわめて重要です。彼はそこで聖なる主のことばを述べています。「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」。そしてそのあとすぐに付け加えて、「これは、イエスを信じる者が後になってから受ける— οὐ εμελλον λαμβανειν οι πιστευοντες εις αυτον 御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったのも、御霊はまだ注がれていなかったからである」(ヨハ7章38, 39節)と言っています。さて、ヨハネがここで言おうとしているのは、(そのように教える人もいますが) 聖霊の奇蹟の力がまだ与えられていないということではないはずで、これは事実与えられていました。主は最初に福音を宣べ伝えさせるために弟子を遣わされたとき、すべての弟子にこの力を与えられました。主はその時彼らに「汚れた霊と

もを制する権威をお授けになり」、「病人を直し」、さらに「死人を生き返らせる」(マタイ10章1, 8節)をも与えられました。しかし潔める恵みとしての聖霊はまだ与えられていませんでした。それが与えられたのは、イエスが栄光をお受けになった後でした。主は「いと高き所にり、捕われた者をとりこにした」とき、「人々のため、頑迷な者どものためにさえみつぎを受けられた」のです。それは「神であられる主が、そこに住まわれるためでした」(詩篇68篇1-8節参)。また「五旬節の日になって」(使徒2章1節)、そのとき初めて「父の約束を待っていた」(使徒1章4節参)人たちが彼らに与えられた聖霊によって罪に対する圧倒的な勝利者になりました。

12 ペテロも、イエスが栄光を受けるまでこの偉大な罪からの救いは与えられなかったということをはっきりと証ししています。彼は「信仰の結果である、たましいの救いを得ている」「肉体における」兄弟に(1ペテロ1章9, 6参)ついて語り、付け加えて、「この救いについては、あなたがたに対する恵みに(新約の恵みの時代)について預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。彼らは自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光(栄光の救い)を前もってあかしされたとき、だれを、またどのような時を指して言われたのかを調べたのです。彼らはそれらのことが自分のためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに(すなわち、ペンテコステの日に、そしてあらゆる世代にわたって、すべての真の信仰者たちの心の中に)告げ知らされたのです」(1ペテ1章10~20節)。ヨハネはこの土台の上に、すなわち「イエス・キリストの現れるときあなたがたにもたらされる恵み」の上にあの確固たる勧めを築き上げることができたのだらうと思います。「ですから、あなたがたは、心を引き締め、あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい」(1ペテ1章13, 15節)。

13 こうした事柄を十分に考えた人たちは、クリスチャンの特権はユダヤ教の恵みの下にいた人たちの旧約の記録によって測ってはならないということを認めるに違いありません。今や時が満ちて、聖霊が与えられ、神の偉大な救いがイエス・キリストの啓示によって人々にもたらされたからです。

今は天の御国が地上に建てられていて、かつてこの御国について、神の御霊が言われました(ダビデはクリスチャンの完全の模範でも基準でもないのですが)。「その日、彼らのうちのよろめき倒れた者もダビデのようになり、ダビデの家は神のようになり、彼らの先頭に立つ主の使いのようになる」(ゼカリヤ12章8節)

14 ですから、「神から生まれた者は、罪のうちを歩みません」というヨハネの言葉を単純で自然で明らかな意味に従って理解すべきではないということを論証するならば、その論拠を新約聖書から持ってくるべきです。そうでないと、空を打つような拳闘をすることになります(1コリ9章26節参)。論拠の第一は通常新約聖書に記録されている例から持ち出されるようです。「使徒たちでさえ罪を犯したではないか。使徒たちの中でも最も偉

大と目されるペテロとパウロさえも罪を犯している。パウロはバルナバと激しい反目をしたし(使徒15章39節参)、ペテロもアンテオケで偽った行動をとったのではないか(ガラ2章11-14節)というわけです。さて、ペテロとパウロがそのとき罪を犯したとして、そこからあなたは何を導き出したいと言うのですか。他の使徒たち全員がときには罪を犯すということを言いたいのですか。ここにはそのような証拠の影さえもありません。あるいはこのことから使徒時代の他のクリスチャン全員が罪を犯したということを知りたいのですか。これはますますひどい。これは正気の人であれば考えも及ばないと言われてしまいそうな論法です。あるいはこういうことですか。「もし使徒の二人がひとたび罪を犯したなら、あらゆる時代の他のすべてのクリスチャンが罪を犯し'生きている以上これからも罪を犯し続ける」。おやおや。このような理屈は子どもでも普通の理解力があれば恥ずかしくなってしまいます。議論に色をつけて、人はだれでも罪を犯さなければならないというような結論を導き出すことなどとてもあ-ません。このような言い方を決してしてはいけません。

クリスチャンに罪を犯す必然性が課せられたことはありませんでした。クリスチャンにとって神の恵みは確かに十分でした。今日の私たちにとっても事実十分です。彼らにふりかかる誘惑とともに、逃れるべき道が与えられていました。同様に、あらゆる誘惑においてすべての人のたましいが逃れる道がそなえられているのです。だれであれ罪を犯すように誘惑を受けた者が屈してしまう必要はありません。耐えることができないような誘惑を受ける人はだれもいないのです。

15 「しかしパウロは主に三度も願いながら誘惑から逃れることはできなかつたではないか」。パウロの言葉を文字通りに訳出して考えてみましょう。「私は、肉体に一つのとげを与えられました。それは私を打つための、サタンのお使いです。脇のことについては、これを(あるいは彼を)私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は私に、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである。』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、弱さに甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです」(Ⅱコリ12章7-10節参)。

16 このみことばは罪の擁護者の要塞の一つであるため、徹底して考えてみるのが良いかもしれません。観察してみましょう。まず第1に、このとげは、それがどのようなものであれ、パウロに罪を犯させるようなものでは決してありません。ましてそのことのゆえに、彼が必然的に罪を犯さなければならなかつたということもありません。ですから、クリスチャンはだれでも罪を犯さなければならないということをここから証明することはできません。第二に、古代の教父たちは、そのとげは肉体的苦痛であつたと教えてくれています。テルトリアヌスは「ひどい頭痛であつた」と言っており、クリュソストムスとヒエロニムスがこれに同意しています。キプリアヌスは少し一般的に、「肉と体の多くの辛い

苦痛」と言っています。第三に、「私を打ちのめす、あるいは続けざまに打つ、あるいは打つ、肉体に対するとげ……わたしの力は、弱きのうちに完全に現れるからである」(II コリ12章7, 9節参)というパウロ自身の言葉がまさしくこれに一致しています。この弱さという言葉は、わずかに二節の間に四回も登場します。しかし第四に、たとえそれがどのようなものであれそれは内的罪でも外的罪でもありえませんでした。それはプライドや怒りや肉欲といった内的衝動でもなく、その外的な現れでもありえませんでした。これは、その後すぐに続いている言葉から、異議を差し挟む可能性がまったくないほどに明らかです。「ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう」。まさか彼がプライドや怒りや肉欲を誇ろうとしたというのではないでしょう。このような「弱さ」を通してキリストの力が彼をおおったのでしょうか。彼は続けます。「ですから、私は、弱さに甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです」(同21章9～10節参)。つまり肉体的に弱いときに、霊的には強いということです。しかし、私がプライドや肉欲で弱いときに、私は霊的に強いなどということがあられるのでしょうか。私は今日、キリストの力がおおっていると思う人たちすべてに証拠になっていただきたいと思います。怒りやプライドや肉欲を誇ることができますか。こういう種類の弱さに甘んじることができますか。この弱さによってあなたは強くなれると思いますか。それから逃れるためには、もし可能であれば、地獄に飛び込もうと思いませんか。ですからパウロがそれらを誇り、それらに甘んじることができたか、自分で判断してください。

最後に見ておきたいことは、このとげはパウロがこの書簡を書いた「十四年」以上前に(同12章2節)与えられたものであり、この書簡自体彼が生涯を閉じる数年前に書かれたものであったということです。

ですからこの書簡を記した後にも走るべき道程と多くの戦いと手に入れるべき勝利がまだ自分の前に残されていたので、神の賜物とイエス・キリストにおける知識をますます受け入れるようになっていきました。したがって彼が当時霊的な弱さを感じていねという事実から(たとえそのようなものがあつたとしても)、彼が強くされることは決してなかったし、また年齢が進んでキリストにある父のようになったパウロが依然としてその同じ弱さに苦しんでおり、死を見るまで高い状態に引きあげられることはなかったという結論を導き出すことはできません。こういったこと全部を考えてみて、パウロの例はこの問題と全く関係がないし、「神から生まれた者は罪のうちに歩みません」というヨハネの主張とぶつかることも決してありません。

17 「しかしヤコブはこれと正面から矛盾することを言っていないか。彼は『私たちはみな、多くの点で失敗をするものです』(ヤコ3章2節)と言っています。ここで失敗をすると言われているのは、罪を犯すということと同じではないですか」。この箇所はそうだと思います。ここで言われている人は罪を犯したと思います。彼らがみな多くの罪を犯したことも認めます。ところでここで言われているのはだれのことでしょうか。もちろん神が遣わされたのではない「多くの者や教師」(同3章1節参照)のことです(おそらく「行い

のない信仰」を教えた「愚かな人」と同じ人たちのことを指しているのだと思います。「行いのない信仰」は、その前の章で厳しく非難されています)。ヤコブ自身のことや真の意味でのクリスチャンのことを言っているわけではありません。「私たち」という言葉を使ったとき(「私たち」という言い方は聖書だけでなく他のあらゆる書物の中で、ありふれた修辭的表現法として用いられています)、ヤコブはおそらく自分自身のことも真の意味でのクリスチャンもその中に含めていなかったことは明らかです。このことは第一に、九節にある「私たち」という言葉の用法から明らかです。「私たちは、舌をもって、神をはめたたえ、同じ舌をもって、人をのろいます。賛美とのろいが同じ口から出て来るのです」(同3章9-10節)と彼は言っています。そのとおりです。しかしヤコブの口から出てくると言っているのではなく、キリストにあつて新しくされた者から(Ⅱコリ5章17節参照)出てくると言っているのでもありません。第二に、間違いなく問題の箇所と関係があるそのすぐ前の節から見てもこれは明らかです。「私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。私たちはみな、多くの点で失敗をするものです」(ヤコ3章1節)この「私たち」とはだれのことでしょうか。ヤコブのことではありません。真の意味でのクリスチャンでもありません。多くの失敗のために「格別きびしいさばきを受ける」(同3章1節)べきだということを知っている人たちのことです。ヤコブ自身について、あるいは彼のような歩み方をしようと思う人たちについて、このようなことが語られるはずもありませんでした。「肉に従って歩まず御霊に従って歩む人が罪に定められることは決して」(ロマ8章1節参)ないからです。ところで第三に「私たちはみな、失敗をするものです」(ヤコ3章1節)という言い方がすべての人、あるいはすべてのクリスチャンについて言及したものでありえないことを、その節自体が証明しています。

最初に出てくる「私たち」は失敗したわけですが、その節の中のすぐ後に「失敗しない」人に関する言及があり、失敗しない人は失敗した私たちと明らかに対照的に区別されていて、「完全な人」(同3章2節)であるという言い方がされているのです。

18 ヤコブはこのように自分の立場をはっきりさせ、自分の言葉の意味を確定しています。しかしヨハネは、それでもだれか疑いを持ったままにいる人がないように、ヤコブの後何年も経ってから文章を残して、前述した宣言を出して議論の余地を全く残さないようにしています。しかしここで新しい困難が生じてくる可能性があります。ヨハネが自分で行っていることをどう調和させるかという問題です。ある箇所では彼はこう言います。「だれでも神から生まれた者は、罪のうちに歩みません」(Ⅰヨハ3章9節)。そして再び、「神によって生まれた者はだれも罪の中に生きないことを、私たちは知っています」(同5章1-8節)述べ、ところが他の場所では、「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません」(同1章10節)さらに、「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません」(同12)と言うのです。

19 これは最初きわめて困難な問題であるかのように見えるかもしれませんが、以下のことを観察すれば消えてなくなります。第1に、十節が八節の意味を決めているということです。八節の「もし、罪はないと言うなら」という言い方は、十節の「もし、罪を犯してはいないと言うなら」という言い方で説明されるのです(同1章8節)。第二に、今考察していることは、私たちが以前に罪を犯したことがあるか、罪を犯したことがないかということを行っているのではなく(I I コリ 2 2 章2節参)、またこれらの節が私たちが今罪を行っているとか、今罪を犯しているというようなことを主張しているのでもないということです。第三に、九節は八節と十節の両方を説明しています。「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(I ヨハ 1 章9節)。彼はあたかも次のように言おうとしたのではないかと思います。「私はかつて『御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます』という確信に至りました。しかし、私は血が必要ではない、潔められるべき罪はもう自分にはないと言ってはなりません。もし「罪はない」「罪を犯してはいない」と言うなら、私たちは自分を欺いており、神を偽り者とすることになるのです。しかしもし私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、私たちの罪を赦すだけでな、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」。それは私たちが行ってもう罪を犯さないためです(ヨハ 5 章14節参)・

20したがってヨハネは、他の聖書の著者だけでなく、自分自身とも矛盾していません。このことは、もし彼がこの問題について主張していることすべてを見やすく並べてみれば、さらにはっきりしてきます。彼は第一、「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめる」と述べ、第二に、「だれも、自分は罪を犯したことはないし、潔められなければならない罪も持っていないと言うことはできない」。しかし第三に、「神は私たちの過去の罪を喜んで赦してくださり、来るべき時のために私たちを罪から潔めてくださる」。そして第四に、「私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もしだれかが罪を犯すとしても」、あるいは「犯したとしても」(と訳すことも可)、罪の中にとどまり続ける必要はない。「私たちには、御父の御前で弁護してくださる方がある」(I ヨハ 2 章1節参)からであるというわけです。ここまではすべてがはっきりしています。しかしこのようにきわめて重要な点で疑いが残ってしまわないように、ヨハネは三章でこの問題を再び敬-上げ、自分が意味しようとしていることを十分に説明しています。彼はこのように言います。「子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。(私が罪を犯し続けている人に何らかの促しを与えたというような話に惑わされないように)。義を行なう者は、キリストが正しくあらわれるのと同じように正しいのです。罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現われたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちを歩むことができないのです。そのことによって、神の子ども

と悪魔の子どもとの区別がはっきりします」(同3章7-10節)この時点に至るまでは弱い心を持った人たちがおそらくいくらかの疑いを抱いたことがあったとしても、問題点はここで、靈感された著者の中の最後の人によってあえて解決されており、決定的にはっきりしています。ですから、ヨハネの教理と新約聖書全体の大意の両方に従って、このような結論を出したいと思います。「クリスチャンは罪を犯さないという意味で完全だということができる」。

21 これはすべてのクリスチャンにとって栄光に満ちた特権です。「キリストにある幼子」(Iコリ3章1節参)のレベルのクリスチャンにとっても特権です。しかし第二に、悪い思いや悪い気質から自由にされているという意味で完全であると断言できるのは、「主にあって強められている」(エペ6章10節参)、「悪い者に打ち勝った人」、あるいは「初めからおられる方を知った」(Iヨハ2章13, 14節)人だけです。第一に、悪い、あるいは罪深い思いからの自由ということですが、ここで注目しておきたいことは、悪に関する思いは必ずしも悪い思いではないということ、また罪に関する思いは罪深い思いとはなはだ異なったものであるということです。たとえば、ある人が他人が犯した殺人について考えているとします。しかしこれは悪い、罪深い思いではありません。私たちの聖なる主ご自身も、悪魔が「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう」(マタ4章9節参)と言ったとき、悪魔が言ったその事柄を考え、また理解しました。しかし主が悪い、罪深い思いを持たれたことはありませんでした。また実際、そのような思いをいらかでも持つことはできませんでした。このことから、真のクリスチャンもそのような思いを持つことはないということが言えます。「弟子は師以上には出られません」(ルカ6章40節参)。したがって主が、悪い、罪深い思いから自由にされているなら、彼らも同じように自由にされるのです。

22 ところで実際のところ、「その主人のように」なっているしもべの中で、悪い思いはどこから生じるのでしょうか。(もし仮にそのようなものがあるとすれば)「悪い考えは、人の心から出て来ます」(マコ7章21節)。ですから彼の心がもはや悪くなければ、悪い思いがそこから出てくることはありません。

もし木が腐っていれば、実もそのようになります。しかし木が良ければ、その実も良いのです(マタ2章3節)。主ご自身がこのように証言されました。「良い木はみな良い実を結びます。良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません」(マタ7章17-18節)

23 パウロは自分の経験から、真のクリスチャンの持つ同じ幸せな特権について断言して述べています。「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。私たちは、さまざまな思弁と(あるいはむしろ「推理」(reasonings)と訳したほうが良いかもしれない。λογισμους という語は神の宣言や約束や賜物に反するプライドや不信仰の推論すべてを意味するものだからである)、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させます」(I I

コリ10章4, 5節)。

24 第二に、クリスチャンは真の意味で悪い思いから自由にされているように悪い気質からも自由にされています。これは主ご自身が宣言された前述のことばから明らかです。

「弟子は師以上には出られません。しかし完全な者はみな、自分の師ぐらいにはなるのです」。主はそのすぐ前に、キリスト教の崇高な教理と血肉にとってきわめて辛い教理をいつか述べられました。「あなたがたにわたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。あなたの片方の頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい」(ルカ6章27, 29節)さて、主は世がこのような教えを受け入れないことを知っておられたため、すぐに付け加えます。「いったい、盲人に盲人の手引きができるでしょうか。ふたりとも穴に落ち込まないでしょうか」(ルカ6章39節)。あたかも以下のように言おうとしているかのようです。「彼らもあなたも一緒になって滅んでしまわないために(ヨブ34章1-5節参)、このような事柄に関しては血肉に相談してはならない(ガラ1章16節参)。霊的な洞察力を欠いている人に相談してはならない。神は彼らの理解力の目をまだ開いておられないのである」(エペ11章8, 4章18節参)。主は次の節で、二つの大きな反論を取り除かれます。賢い愚か者はこの二つの反論をもって、あらゆる場合に私たちに相対して来ます。二つの反論の一つは、「このようなことはあまりに辛くて我慢がならない」(マタ23章4節参)ということで、もう一つは、「このようなことはあまりに高すぎて達成できない」(詩篇139篇6節参)ということです。しかし主は「弟子はその師にまさらず」と言われます。したがってこういうことです。もしわたしが苦しんでいるなら、わたしの足跡をたどることに満足しなさい。

そしてその時には、「完全な者はみな、その師のようになる」というわたしの言葉をわたしが成就することを疑ってはなりません。その師はあらゆる罪深い気質から自由にされていたのですから、彼の弟子、すなわち真のクリスチャンはみな同じように自由にされるのです。

25 クリスチャンであればだれでも、パウロと共に、「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」(ガラ2章20節)とすることができます。外的な罪だけではなく、内的な罪からの解放についても明らかに述べている言葉です。これは消極的にも積極的にも表現されています。消極的には「私が生きているのではなく」、すなわち私の悪い性質、罪の体が破壊されたということです。積極的には「キリストが私のうちに生きておられるのです」ということです。ですから、聖さと正しさと善のすべてが生きているということになります。実際のところ、この両者、「キリストが私のうちに生きておられる」ということと「私が生きているのではない」ということは結びついていて切り離すことはできません。というのも、「光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう」。あるいは「キリストとベリアルとに、どんな調和があるでしょう」(Ⅱコリ6章14節)。

26 ですから真の信仰者の中におられる方が「彼らの心を信仰によってきよめて」(使徒



15章9節参)くださいます。「栄光の望みであるキリストを心の中に持っている人はだれでも」(コロ1章27節参)、「キリストが清くあられるように、自分を清くする」(Iヨハ3章2節)からです。彼はプライドから清くされます。キリストが悪な心を持っておられたからです。彼は自己中心的意志と願望から清くされます。

キリストが父のみこころを行い、父のみわざを成し遂げることを望んでおられたからです。また彼は、一般的に言われる意味での怒-から清くされます。キリストが柔和で優しく、忍耐があり辛抱強い方だったからです。私は、「一般的に言われる意味で」、と申し上げたいと思います。すべての怒りが必ずしも悪ではないからです。主ご自身について書かれている所を読むと、かつて「怒って彼らを見回された」(マコ3章5節)こともありました。しかしどのような怒りをもって見回されたのでしょうか。次の言葉、συλλυπουμειοσ、同時に「その心のかたくななのを嘆きながら」であったことが分かります。主はそのとき罪を怒られ、同時に罪人のことを嘆かれました。主は罪を怒り、罪に気を害されましたが、罪を犯した人については悲しまれました。主は怒りをもって、さらに憎しみをもって、その不服従をご覧になり、悲しみと愛をもって悪の人をご覧になりました。完全である人は、行って、同じようにしなさい(ルカ10章37節)。「主のように怒りなさい。そうすれば罪を犯さないことになります」(エペ4章26節参)。神に敵対するあらゆる罪に対しては嫌悪感を抱き、その罪を犯した人に対しては愛と優しい憐れみだけを持つようにしましょう。

27このようにイエスは「ご自分の民をその罪から救ってくださる方です」(マタ1章21節)外的な罪だけではなく、心の中にある罪、すなわち悪い思いや悪い気質からも救いだしてください。「確かに内的な罪からも救ってくださるには違いないが、死ぬまでは無理だ。この地上では無理だ」と言う人もいます。しかしこの考え方とヨハネの明白な言葉とをどのように調和させることができるでしょうか。「このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあってキリストと同じような者であるからです」(Iヨハ4章)。ヨハネはここで、自分自身と他の生きているクリスチャンについてあらゆる反駁の余地もないほどはつき-語っています。彼は(あたかも彼はこの言い抜けを見越して、それを土台からひっくり返そうとしているかののように)、自分自身と生きているクリスチャンは、死の時に、あるいは死んだ後にというだけではなく、「この地上において」その師のようになることができると断定しています。

28 この書簡の一章にある彼の言葉は、まさにこれと一致しています。「神は光であつて、神のうちには暗いところが少しもない。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます」。さらに「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(Iヨハ1章5, 6節など)。さて、ヨハネがここでも「この世で」行われる救いにつ

いて述べていることは明らかです。「キリス-の血はすべての罪から私たちを(生きているクリスチャンを)潔めるであろう」(死の時に、あるいは裁きの日に)ではなく、(今現在)「潔めます」と語っているのです。また、もし何らかの罪が残っているなら、私たちはすべての罪から潔められていることにならないし、もし不義が少しでもたましいの中に残っているなら、すべての不義から潔められていると言えないのもこれまた明らかです。またどのような罪人も自分のたましいに向かって、これは義認だけに関係している、すなわち罪のとはがめから潔くされることだけに関係していると言うべきではありません。その理由は、第一に、これはヨハネが明らかに区別していることを混同してしまっているからです。ヨハネは最初に「その罪を赦し」と言って、それから「すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(同1章9節)と述べています。第二に、これは行いによる義認を主張し、可能な限りそれを強調することになるからです。その考え方は、外的なホ-リネスはもちろん、内的なホ-リネスも義認の前に必要なものにしてしまっています。もしここで言われている潔めがまさしく罪責からの潔めであるなら、「神が光の中におられるように、光の中を歩んでいる」(同1章7節参)という条件を満たしていなければ、私たちはとはがめから潔められていない、すなわち義とされていないことになるのです。ですから、クリスチャンはこの世において、すべての罪から、すべての不義から救われることができるし、クリスチャンは罪を犯さないという意味で、また、悪い思いと悪い気質から自由にされるという意味で完全になることができる、という結論だけが残ることになるのです。

29 王はこのように、聖なる預言者たちによってご自分が語ってきたことを成就されました。それは世が始まって以来語られてきたことです(ルカ1章70参)。特にモーセを通して、「私は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛するようにされる」(申命30章6節)と言われました。またダビデは、「私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください」(詩篇51章10節)と叫んでいます。さらに神はエゼキエルを通してはっきり語られました。「わたしがきよい水をあなたがたの上に振-かけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与えあなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる……。あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる。わたしはあなたがたをすべての汚れから救い……。神である主はこう仰せられる。わたしが、あなたがたをすべての不義からきよめる日に……。諸国の民も、主であるわたしが、くつがえされた所を建て直したことを知るようになる。主であるわたしがこれを語り、これを行なう」(エゼ36章25節以下)。

30 「愛する者たち」。律法と預言者たちの中に「このような約束を与えられているのですから」、また聖なる主とその使徒たちによって、その預言の言葉が福音の中で確かなものとなっているのですから、「いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか」(Ⅱコリ7章1節)。「神の安息にはいるための

多くの約束が」私たちに与えられているのですから、「わたしたちのうちのひとりでも、万が一にもこれにはいれないようなことのないように、私たちは恐れる心を持つてはいませんか」(神の安息に入った者ならば、「自分のわざを終えて休んだはずです」(ヘブ4章1節、10節参)。「私たちは、ただ、この事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走りましょう」(ピリ3章13～14節参)。私たちがまた、「滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入るまで」(ロマ8章21節参)、昼も夜も神に向かって叫び続けましょう。

聖潔の約束(エゼキエル書36章25節以下)

チャールズ・ウェスレ-作

- 1 すべての力と真理と恵みの神  
それらは時代から時代へと続きます  
天地が過ぎ去ってもそのことばは残り  
いつまでも確かに立ちます
- 2 私のたましいは静かに見上げ  
あなたの約束が証しされるのを待ちます  
それは私の動かない希望の対象  
あなたの永遠の愛の保証
- 3 私があなたの憐れみを賛美し  
すべての人があなたの真理を見るため  
偉大で栄光ある御名を誉め諾え  
私の中にホ-リネスを完全にして-ださい
- 4 私が今 世から選ばれて立ち  
聖なる義によって飾られ  
約束の地にたずさえ入れられ  
救い主をまさに私のものと呼ぶならば
- 5 あなたが始められたみわざを行ってください  
私のたましいの奥底をあなたの方に向けさせ  
私を愛してください 永遠にあなたのものであり  
そして私の心にあなたの血潮を注いでください
- 6 あなたの潔める御霊を注いでください  
私の渴きをいやし 私を洗って聖くしてください  
今 父よ 恵みの雨が注がれて  
私を罪より潔くしてください

- すべての罪の汚れから私を潔め  
私の偶像をすべて捨てさせ
- 7 すべての悪い思いから私を洗ってください  
すべての自己とプライドの汚物から
- 8 新しい 完全な心を私に与えてください  
疑いと恐れと悲しみから解き放たれた心を  
キリストにある心を分け与え  
私のたましいをあなたに密着させてください
- 9 石の心を取り去り  
(あなたの定めを行わない自分のものとするのでできない石の心)  
この心がこれ以上私の中にとどまらないように  
この石の心を取り除いてください
- 10 私の肉なる心の憎しみを  
すぐに私の体から除いてください  
優しい 委ねた心を与えてください  
潔く 信仰と愛に満ちた心を
- 11 あなたの善い御霊を私の中に置いてください  
健康と愛と力の御霊を  
あなたの勝利の恵みを私の中に植えてください  
罪が再び入ってくることはありませんように
- 12 キリストによって道を歩ませてください  
そうすれば私はあなたの戒めを成就します  
あらゆる点であなたの戒めに従い  
あなたのみこころを完全に行います
- 13 偽ることのないあなたは言われませんでしたか  
私がああなたの律法を守り行うようになると  
主よ 人が否んでも私は信じます  
彼らがみな間違っているも あなたは真実です
- 14 今 罪から解き放たれたいのです  
約束の安息に入りたいのです  
全き愛のカナンに
- 15 そこにいつも私を住まわせてください  
あなたが私の神になることで 私は  
あなたのしもべになりましょう あなたの保証のしるし始めてください  
あなたにある永遠のいのちを私に与えてください
- 16 内側に残っているすべての汚物から

あなたにある救いを私に持たせてください

実際的な罪 生来の罪から

私のあがなわれたたましいが救われ続けますように

17 私の古い 元からあるしみを洗ってください

私にもう言わないでください そのようなことはもうありえないのです

悪魔よ 人よ 小羊はほふられました

血潮はみな私のために注がれました

18 イエスよ 血潮を私の心に注いで-ださい

すべてを潔めるあなたの血潮の一滴が

私の罪深さを去らせ

私を神のいのちで満たして-ださい

19 父よ 私のすべての必要を満たし

あなたご自身が与えてくださったいのちを支えてください

穀物、いのちのパンを取ってきて-ださい

天から下ってくるマナを取ってきてください

20 義の恵みに満ちた実を

あなたの視福の尽きることのない蓄えを

私の中に豊かに増して-ださい

もう私が飢えることのないようにして-ださい

21 私が深い苦情の中で

「私の虚弱 ああ私の虚弱」と叫ばないようにしてください

一人やつれた欠乏に尽き果てています

すべての父の子の中で私だけが

22 苦悩に満ちた渇きと愚かな願望を

あなたの喜びの臨在が取り去ります

それでも私のたましいは求めています

愛の永遠の全体を

23 聖 真実 義なる主

あなたの完全なみこころを証しするため私は待ちます

あなたの恵みのことばを忘れないでください

あなたの御霊のしるしを私に押ししてください

24 誠実に溢れた憐れみを私に兄いさせてください

あなたはそれに信頼するように私に命じられました

柔和で謙遜な心を私に与え

私のたましいを塵の中においてください

25 私の心がいかに汚れているかを見せてください

私が恵みによって更新されるときに  
あなたが私の罪をからにされるとき  
私の恥の全部を見せてください

26 内側の信仰の目を開いてください

天よりあなたの栄光を示してください  
そうすれば私の全部は沈んで死にます  
驚きと愛にのみ込まれて

27 あなたの恵みによって私を困惑させ 打ちのめしてください

そうすれば私は自分を嫌悪するようになります  
(すべての力 すべての尊厳 すべての賛美  
すべての栄光が私の主キリストにありますように)

28 今 完全の高みを与えてください

今 私を無の中に落としてください  
あなたがご覧になるときに 私をまさに無にしてください  
キリストこそすべてのすべてであることをこの私にも感じさせてください